OSAKA・Ⅱ ZONTA CLUB

大阪Ⅱゾンタクラブ第29号（2010年3月）

巻頭言

熱い思い

会長　西村　博子

会長をお受けして８ヶ月、最近ではお仲間のクラブのイベントなど、色々な会に参加させていただくことが多くなりました。参加するたびに、多くのクラブがそれぞれ特色を持って素敵な活動をされていることに触れ、またその会で新たな出会いに恵まれて、それらはとても楽しく、心から嬉しく思い、めぐり合いの機会となっています。

昨年参加させていただいたクラブのイベントは、テーブルで神戸の家庭養護促進協会の橋本明事務局長様のご臨席でした。数年前のエリアミーティング、基調講演でそのお話をお聞きしたことを思いだすと同時に、たくさんの事をお尋ねしながら、話題はどんどんひろがっていきました。イベントのプログラムの楽しさは言うまでもありませんが、この里親制度はもともと私には学生時代に学んでいたことで、非常に関心のある事柄でしたので、その時間はとても有意義で、里親制度の現状について貴重なお話を聞く機会になりました。

いろいろな奉仕活動を展開されているゾンタクラブが多くある中で、そのクラブとその協会の良き連携と奉仕は30年にもわたるということでした。長く継続して奉仕がなされるのには「**両者の熱い思い**」があるんですと橋本明事務局長様は話してくださいました。そのお言葉に感銘を受けました。歴史の重みを感じると共に本当にそうだなと。

私たちのクラブもそうした熱い思いをもって奉仕活動をさらに実践していきたいという気持ちがふくらみ、またこれからの活動の足元をみつめる機会にもなりました。

私たちのクラブの奉仕活動は、設立以来つづけてきたもの、設立10年目の時みなおしたもの、そして再び激動の時代の流れの中で、出会った奉仕活動があります。国際、国内を問わず、それぞれが地域に根ざした奉仕であり、会員の熱い思いによるものであることに、再び勇気づけられ、またそれらを継続していくことの大切さを思う今日この頃です。

どのような奉仕活動を展開して、継続していくことができるのか、会員皆さまの熱い思い、奉仕先との熱い思いを大切にして、大阪Ⅱゾンタクラブらしい奉仕活動を継続していきたいと願っています。どうぞ、会員の皆さまのご指導をお願い申し上げます。

2009年12月忘年会

報告 1

西村　博子

2009年10月1日～3日、至仙台。

26地区が日本のみとなってから、２回目の地区大会は、みちのくの仙台国際ホテルにて開催されました。ベリル・ステン国際会長を迎えて、全国から46クラブ、254名の参加がありました。会長就任後の初めての地区大会、仙台の地は七夕祭りを見て以来２度目、わくわくと緊張の中にもゾンタの精神をあらためて研鑽し、その活動を理解し、また交流を深めて楽しい充実した機会になりました。大阪Ⅱからは、笠置さん、久岡さん、宮本さんと共に参加いたし、ゾンタストアでは、私たちの支援先でありますベトナム・ベンチェの特別支援児学校の卒業生により製作された額などの協力販売もいたしました。

１日目の基調講演は「脳を鍛える」というテーマで東北大学加齢学研究所の川島隆太氏によるものでした。人は加齢とともに脳機能も低下するが、前頭前野を育むことで、脳を元気に保ち豊かに生きましょう。そのためにも意識してきっちりその前頭前野を使うことだそうです。計算や音読、手指を使うことも含めて、バランスの良い食事、人とのコミュニケーション、運動の習慣のほかに、趣味をたくさん持つことや、ボランテイア活動に積極的に参加することも大いに刺激を与えて良いそうです。またアンチエイジングという言葉ではなく、スマートエイジングという言葉を提唱されています。歳を重ねるということは豊かを意味する、より賢く歳を重ねてと大いに励まされました。夕刻からのレセプションでは、宮本さんとともに大阪Ⅱゾンタクラブのたすきをかけて、皆さまと交流しながら、壇上で、新入会員ヤプケさんやゾンタストアのベトナムでの製作の額の紹介をして、クラブの話題を盛り上げました。

２日目からビジネスセッションが始まりました。ロバート議事法に基づき、プログラムに添って、議事がすすめられました。審議事項の一つのモンゴル・ゾンタクラブの26地区編入は否決されました。また次期の地区役員候補者は各スピーチの後、選挙が行われ選出されました。

３日目はワークショップです。「21世紀の女性リーダーとしてーゾンタの活動とLAA」というテーマで、①地区における2008～2010年のLAA委員の取り組み　②地区における奉仕活動の現状と提示があり、各エリアの奉仕活動が映像と文字で紹介されました。各クラブがそれぞれ、ゾンタの精神を大切にして、クラブの特色を持った奉仕活動を行っている、またその活動の豊富さとエネルギーにあらためて感服いたしました。

大会の決議として、女性差別撤廃条約（CEDAW）の選択議定書の早期批准を求めることとCEDAWに関する専門委員会の設置を求めることが採択されました。

ゾンタは世界の女性の地位向上をめざして、その運動を展開しています。私たちの奉仕活動がその目的に添って行われていくことの大切さをあらためて学びました。この大会で国際会長にお会いでき、そのスピーチをお聞きしたことも嬉しかったです。

末筆ながら、地区大会開催を多大なるエネルギーで、日本のゾンシャンのためにご準備実行くださいました山本ガバナーをはじめ、地区役員、ホストクラブの仙台ゾンタクラブの皆さまに、心より感謝申し上げます。

報告 2

久岡　眞佐代

10月1日（木）～10月3日（土）、ベリル・ステン国際会長をお迎えして仙台国際ホテルにおいて地区大会が開催され、私は10月2日（金）～3日（土）の2日間参加しました。夏の暑さが抜けきらない大阪空港を出発し、1時間20分後に仙台空港に着くと、そこは爽やかな秋の心地よい季節になっていました。

会議場では穏やかな雰囲気の中でスムーズで効率的な議事運営が進行し、国際会長が病気を抱えながらゾンタ活動に奔走し、今後もルワンダ、リベリアなど世界各地の恵まれない女性に対する支援を続けていきたいと熱く語られたときは会場から大きな拍手が何度も沸き上がりました。

山本ガバナー、地区役員、仙台Ⅰゾンタクラブの皆様には仕事と家庭を犠牲にして万全のご準備をいただき、深く感謝申し上げたいと思います。また、経費節約を心がけたと伺いましたが、随所に創意工夫に満ちた心のこもったおもてなしをいただき、気持ちいい憩いのひとときを過ごさせていただきました。

10月2日(金)の晩餐会では、女子高校生によるハンドベル演奏、地元の皆様による雀踊りを楽しみました。海の幸たっぷりの豪華なフランス料理は素材の新鮮さが生きている格別の美味しさでした。

2008年6月のロッテルダムでの世界大会ではベリル・ステン国際会長に接するチャンスがなく大変心残りでしたが、晩餐会で再会できて嬉しくなりました。議題はネットで交信できても、心と心の交流は、地区大会の現場に足を運んで自分の目で見て、自分の肌で感じるものだと思いながら帰路に就きました。

国際ゾンタ会長のメッセージ

宮本　典子

大会第３日のワークショップはゾンタ国際会長 Beryl Sten さんのお話だった。歴代の会長もいずれも素敵な方であったがとりわけ Beryl Sten さんは上品で理知的な方で、スライドを使って国際ゾンタ統括について詳しい話を伺った。通訳も東京Ⅲゾンタの佐渡さんと北九州ゾンタの木下さんで家庭的な雰囲気の中議事は進行した。

ゾンタ国際理事の任務はこの組織の事業を成功させるために信託されているのであって誰でもなれるものではない。

役員は、信頼を持ってまかされているので Fiduciary(信託される)、Legally(法律遵守する)、Care(責任を持つ)、Fair（公平である）、Loyalty(誠実である)、Obedience(組織の決定に従う) という条件を持っていなくてはならない。役員は、誰かが何時かでなく任期中に責任を果たさねばならない。自分のキャラクターを信じて自分の意志で任務を果たしてゆかねばならない。ゾンタのために時間があるか常に問いつづけなければならない。

国際ゾンタ理事会と財団理事会・役員は財政的手腕も必要である。ゾンタの資産は常に外部の投資ファンドによって運用されていて、昨今の経済危機の影響をもろに受けている。即刻の対応・改善が必要である。すでに事務局の移転がなされており、これは評価できる。他にもソフトウエアの改善やサーバー、パソコンなども時代遅れで代えねばならなかった。またスタッフの一部が異常に低い賃金で働いていることも判明した。世界的に女性の地位改善を行って来たにもかかわらず、内にはしてなかった。スタッフの数を減らして給料もあげるようにした。これらは年会費のなかで運営されている。

年会費と基金、寄付金はそれぞれ目的別に分かれている。財団基本基金は永久基金であり、どのように必要なプロジェクトがあっても当座の目的に使えるのは利子と元本の中のほんのわずかな額だけである。従って皆様には活きた基金、すなわち目的別の基金（アメリア・イアハート、ジェーンＭクローズマン、YWPA）、ローズ基金（特定のプロジェクトを指定せずもっとも必要な所へ使える）へ寄付していただきたい。もしすでに財団基本基金に寄付された会員があって活きた基金（近い将来に女性を支援するために使われる）に変えたいと云う希望があれば寄付の額と移転先を知らせていただきたい。

いずれにしても組織を支えるのは会員である。会員を増やすことが何よりも重要である。皆さんそれぞれ 2～3 人の会員を集めましょう。そしてゾンタの基本原理（Golden Rule）は“まずビジネス、奉仕はその次”。ゾンタの役割は女性の地位向上にある。災害や貧困で困難を抱えている人は沢山いるがこれらはその国の政府が解決するものでゾンタのすることではない。

世界各地で女性は暴力をふるわれている。あらゆる国際、非国際紛争地帯において交戦中、交戦後を問わず女性に対する暴力が報告されている。データによると世界中の女性の５人にひとり、あるいは３人に１人が夫や恋人による虐待を受け、セックスを強要されている。そしてこれら暴力と HIV/AIDS の蔓延は密接に関連している。安全なセックスをして欲しいと言えないことやセックスを強要されていることが AIDS の蔓延と深くかかわっている。

アメリカ政府のスポンサーの調査では、毎年およそ 80 万人が国境を越えて不正に売買されている。その 80% は女性と少女で 50% が未成年者である。

また今年だけでおよそ 50 万人の女性が妊娠中、または出産時に死亡している。発展途上国は先進国よりもおよそ 300 倍多い。

世界中におよそ 3300 万人いる難民のおよそ 72% が女性と子供である。ルワンダだけでも 50 万人の女性が消えている。この人たちを保護するだけでも、女性の地位改善に効果がある。

これらをうけてゾンタでも LAA 委員会を設け女子差別撤廃条約の各国での批准を支援することを目標にしている。日本でも検討して欲しい。

国際ゾンタは今年（2009 年 11 月 8 日～2010 年 11 月 8 日）創立 90 周年を迎えた。記念ロゴはもう使える。サンアントニオの国際大会（2010 年 6 月 25 日から）にぜひおいでいただきたい、と締めくくられた。

不幸な境遇の魚たち、その不幸への対処法

坂本　千代

2009年9月10日の例会では岩田勝哉先生（和歌山大学名誉教授）による、変わった生態を持つ魚のお話をしていただいた。劣悪な環境をその魚たちがどう切り抜けるのかという、環境適応に関する話題である。取り上げられたのは、和歌山県白浜のトビハゼと、サンゴ礁に棲むカクレクマノミおよびダルマハゼであった。

まずトビハゼの不幸とは「干出と水質の悪化」である。環境悪化で水に棲み続けることができなくなったこの魚はなんと空気中での生活を選択したのであった。水棲のハゼのえらや皮膚との違いの説明を受けてから、トビハゼの奇妙だがユーモラスでかわいい写真をパワーポイントでたくさん見せていただいた。「保湿が肝心」「歩くときは体をもちあげて」「えさだって陸上で捕らえる」「求愛も陸上で」「ダンディーな歩き方」と言った説明付きのめずらしい写真のあと、彼らのマイホームである巣穴の断面図を見ながら、天敵シオマネキを追い払う雄のトビハゼのショットもあった。卵のある巣穴の維持管理は本当に大変で、それを担当する雄のほうが雌よりも短命であるということで、聴衆はみな同情のため息をつくこととなった。

次はカクレクマノミとダルマハゼの「出会いの不確実性」という不幸の話であった。まずはハタゴイソギンチャクに棲むカクレクマノミ。彼らは一夫一婦のペアで繁殖する。卵からふ化した稚魚は海流に乗って遠くに運ばれながら成長して、住処となるハタゴイソギンチャクを見つけるわけであるが、うまく雄雌のペアが出会えるとは限らない。そういう時は一方の雄が雌に性転換することになる。このようにどんな時でも繁殖できる仕組みになっている。また雌雄のペアが棲むイソギンチャクにやってきた稚魚は小さいままで、ペアの片方が欠けることがあれば、そこで新たな雌雄のペアができるのだそうである。

最後はショウガサンゴの中に棲息するダルマハゼのお話。彼らも一夫一婦制であり、雄が卵の世話をする。この魚のすごい所は双方向の性転換ができることで、雄→雌→雄とか雌→雄→雌という変化が可能である。性転換には1ヶ月ほどかかりその間には卵を産むことができない。それでも彼らのモットーは「遠くの異性よりも近くの同性」だそうだ。未熟体の時に体が大きいほうが雄になり、小さいほうが雌になってペアを形成するのだが、体を張って卵を守る役目の雄よりも、産むだけでいい雌の方が大きくなり、そうすると今度は夫と妻の両方の性転換が起こり役割が変わる・・・。理想的な夫婦の育児分担を行う魚たちであった。

パワーポイントを使ってのご説明がほんとうに興味深く、あっと言う間に終わってしまった30分の卓話であった。岩田先生、ありがとうございました。

9月例会：岩田勝哉先生、行岡陽子エリアディレクターとともに

11月例会：家森幸男先生の卓話

世界の長寿食文化とは？ －女性の美と健康に鍵－

福本　敏子

平成21年11月19日（木）午後6時より、リーガロイヤルホテルにおいて大阪Ⅰゾンタクラブと大阪Ⅱゾンタクラブの合同例会が開催されましたが、武庫川女子大学国際健康開発研究所所長・京都大学医学部名誉教授の家森幸男先生が「世界の長寿食文化とは？－女性の美と健康に鍵－」と題してご講演くださいました。先生は二十数年来、世界各国で食と健康の関係を研究しておられ、エビデンスに基づいた内容を分かりやすく楽しくお話しくださいましたので、以下に要旨をご紹介させていただきます。

健康長寿を代表する国の一つがグルジアですが、グルジアの人たちは野菜、果物、大豆性たんぱく質を豊富に取り、魚やヨーグルトも欠かしません。肉も塩や砂糖を使わずにプルーンを煮詰めた調味料で食べるので、コレステロール値が低い。塩を取りすぎると高血圧や脳卒中の割合が増えることが判明しています。日本人の塩分摂取量は一日平均12グラムですが、WHOは一日平均6グラムに減塩することを目標にしています。心筋梗塞が多い地域は寿命が短く、死亡率は世界のどの国でも男性の方が女性より2倍ほど高くなっています。そこで男女の性差に着目し、動物実験を行い、女性ホルモンのエストロジェンに似た大豆成分、イソフラボンが入った胚軸を与えると、ネズミは太らず血圧も上がりにくく、脳卒中になりにくいことが分かりました。また、魚に含まれるDHAは心筋梗塞の死亡率を低下させることも分かっています。世界で長寿な地域の人は、海の幸の魚介類、山の幸の大豆をバランスよく食べて長寿を保っています。

家森幸雄先生は有名な「カスピ海ヨーグルト」を日本に初めて紹介されたそうですが、先生のご講演を拝聴し、食育の大切さを再認識すると同時に日本食である「大豆製品（味噌、きなこ等）」の効用をお聞きし、先人の知恵に敬服いたしました。また、家族の食を預かる主婦としても大変有意義なご講演でした。

宇宙飛行士　山崎直子さん

尼木　純子

大阪Ⅱゾンタの2010年1月新年会で福本敏子先生より宇宙飛行士山崎直子様のお話を伺い、2010年3月18日に日本人女性として向井千秋宇宙飛行士に次ぎ米スペースシャトルに搭乗されるということをお聞きし、とても美しくはつらつとなさっているお写真を拝見して山崎女史に興味を覚えました。

どういうことで宇宙飛行士になられたのかと調べました。小学生の低学年から宇宙へのあこがれをいだき、それをずっと抱き続けて中学3年生の時スペースシャトルの打ち上げ中の爆発事故を見て、怖いと思わず、女性教師クリスタ・マコーレフさんも乗っていらしたのですが、彼女達の夢を受け継ぎたい、尊い志を受け継ぎたいと強く思い、その夢をずっと抱き続け、どんな困難にも打ち勝って、みごとこのたび宇宙に旅立つことになった、というエピソードを知り、女性であっても自分の夢に向かい、ひたすら突き進む彼女を応援したい気持ちにかられました。私も大きな夢をもってそれに邁進してゆくと、必ず結果は現れると信じてこれからも彼女のように生き生きと夢に向かって邁進してゆく人生を送りたいと心より思いました。

下記は、当日の配布資料からの引用です。

日本人女性として1994年に搭乗した向井千秋宇宙飛行士に次ぎ、米スペースシャトル「アトランティス(STS-131/19Aミッション)」に搭乗する宇宙飛行士である。STS-131ミッションは多目的補給モジュール(MPLM)を搭載し、食料品、補給品、実験装置などを国際宇宙ステーション(ISS)に運ぶ。山崎直子宇宙飛行士は今回が初飛行で、ミッション・スペシャリストとして搭乗する。

1999年に宇宙飛行士の候補に選ばれ、2000年には、夫の大地さんと結婚。2002年に優希さんが生まれた。国際宇宙ステーション(ISS)に長期滞在する要員として採用され、生まれたばかりの優希さんを日本に残してロシアで訓練を受けた。その間、夫、大地さんは、茨城県つくば市にあった家に残り、三菱系企業の技官としてISSの管制をする訓練を受けていたが、保育所に通う優希さんの送り迎えや食事の準備をして「父子家庭」を切り盛りした。さらに両親の介護も加わり大地さんは優希さんを車に乗せて両親がいる神奈川県の介護施設や病院を往復した。そして、2004年には家族で米航空宇宙局(NASA)のあるヒューストンに住むことになり、大地さんは会社を辞めて米国で主夫をする決断をした。大地さんはその後、民間の宇宙関連の会社「有限会社国際宇宙サービス」を立ち上げた世界初の「民間商業宇宙飛行士」となっている。宇宙飛行士は転居、結婚、死別など環境変化で家族にストレスがかかる状況をうまく乗り切ることも、宇宙飛行士の能力の一つといわれているが、ご本人の頑張りはもちろんのこと、家族の方々のサポートなしでは成し遂げられない偉業である。

山崎直子さんが搭乗するスペースシャトルは2010年3月18日に打ち上げられ、約2週間、国際宇宙ステーションの組み立て任務にあたる予定である。山崎直子さんのミッションの成功と無事のご帰還を祈りたい。（福本敏子）

秋の移動例会

内藤　惠子

10月17日、阿修羅に会いに行こう！と、奈良に出かけました。アメリちゃん（ヤプケさんのお嬢さん）も一緒に、まず、東大寺に行きました。大仏様の前に、何匹もの鹿に出会い、童心に返りました。天気予報は、50%雨でしたが、いいお天気で、小学生、中学生、外人観光客など皆、楽しんでいました。久しぶりの東大寺は、世界遺産の中でも、日本一だなあと風格に圧倒されました。

お昼は、興福寺の境内にある塔の茶屋で、名物の茶がゆ懐石を頂きました。ひなびた茶屋の茶室で、骨董の器で懐石を頂き、奈良の風情を楽しみました。お食事の間、すごい雨でしたが、食事のあと、雨も上がりました。阿修羅は、東京から帰ってきて、初日だったので、待ち時間がとれず、奈良町を散策して帰りました。

移動例会で、大阪近郊にみんなで出かけて、思い出が増えています。億劫がらずに参加してください。ひとりで行きにくいところも、連れて行ってもらえます。

2009年10月17日（土）移動例会

10：00	近鉄奈良線・奈良駅・東改札口を出た所で集合 奈良公園を散策し東大寺の大仏殿を拝観
12：00から	例会・昼食　「塔の茶屋」（奈良市登大路町47）
14：00から	駅近ストリートで工芸品・特産品などの店を見たあと解散

2009年FUJI教育基金奨学金授与の旅

中塚　淳子

平成21年10月6日、関西空港よりベトナム・ホーチミン市タンソンニャット空港へと飛び立った。東京から6名、関西から6名、FUJI基金事務所のルーン夫妻と通訳のトンさんの15名の小団体の行動が始まることとなった。ホテルに着くとすぐアオザイ作りに生地屋へ行き、その後市内のレストランへ、ドクさん夫妻と面会のため向かった。ドクさん夫妻の出迎えをうけ、楽しい会話がはずむ会食。はじめてのベトナム料理、思ったより口に合う。ドクさんのお兄さんベトさんは25歳で亡くなられたことや、ドクさんの奥さんが男女の双子を宿していると大きなお腹をなでながら、うれしそうなお顔で話されていた。無事の出産を心から祈った。（10月25日無事出産。日本語で富士・桜と命名。）

10月7日、ベンチェ省へ。「貧しい患者と障害者を助ける会」の事務所訪問。特別支援学校の生徒さんがインフルエンザにかかっているため学校訪問が中止となったことのお詫びを受け、さらに「助ける会」の活動報告として、①心臓手術330人　②目の手術1000人以上　③車椅子贈呈　④奥地へ医者を派遣　⑤特別支援学校の援助　⑥心臓病の子供を持つ貧しい家庭に家を提供　⑦入院患者に食事を提供。その他さまざまなボランティア活動がなされている。「助ける会」は、約800人の会員で、会の活動資金は日本人を含む多くの人々の寄付より行われている。FUJI基金が援助している刺繍教室を卒業した9人のうち3人が刺繍で生計を立てられるようになっている。宮本典子先生が刺繍教室の生徒さんに糸切り鋏を贈られた。その後、メコンの中州にある椰子キャンディ工場、果樹園見学。ニッパヤシが繁茂している水路を小舟で遊覧。ベトナムらしい風景であった。

10月8日、早朝水上マーケット見学。船の中で生活をしている人たちを目の当たりにし、何とも言えない気持ちになる。その後カントー大学へ。5人の学生さんに奨学金を授与。宮本先生が農学部の教室にMERKINDEXを寄贈された。これは、宮本先生のご主人が大切になさっていた貴重な書籍である。最後にカントー大学の学生さんたちと昼食を取った。関西風おじやを作ったら、奨学生に意外に大好評を受けた。その後アンザン大学で20名の奨学生に奨学金を授与。夕食をロンスエンのレストランでアンザン大学生とともに取る。お互いの国の歌の交換がはじまり、なごやかなうちに夕食会と1日が終わった。

10月9日、ロンスエンからチャウドクへ向かう。車窓からの風景は水田のようだ。宮本先生と妹さん夫妻が援助されたという幼稚園2園を訪問。日本の幼稚園より素晴らしい建物。設備も素晴らしくてびっくりしてしまった。ツ・コア・ギヤ高校で、3校の奨学生に奨学金を授与。10月10日、昨日奨学金を授与した高校生とチャウドクの市場見学、観光に行った。みんな本当に素直でいい子供さんたちだ。一斉にベトナムの歌を歌ってくださり、そのお返しに「今日の日はさようなら」を歌った。一同拍手の中、交流昼食会は終わった。

10月11日、ベトナム激戦地の一つ、カンゾーへ。枯れ葉剤の被害でワニの絶滅、マングローブの木が細いことを知る。10月12日。地下トンネル・クチを見学。アメリカ戦終戦17年、その傷跡がなまなましく残っていた。マジェスティックホテル最上階でサイゴン河の夜景を見ながら、ベトナム最後の夜をすごした。まるで映画のワンシーンのようだった。10月13日、すべてのスケジュールを終え関空へ。開発が進んでいるベトナムがらしさを失わないよう願いながら・・・。

ドクさん夫妻とともに

芳川　た江子

この度、大阪Ⅱゾンタクラブへ入会させていただいた芳川た江子です。

私は昭和56年に関西医科大学を卒業し、その後大阪医科大学皮膚科学教室に入局し、現在亡き父(芳川仙作)の創設した医療法人仙養会北摂総合病院で皮膚科部長をしています。病院は阪急京都線の総持寺駅から徒歩10分くらいの所にあり、217床の急性期病院です。昭和58年に父が亡くなってからは、主人（芳川浩男）が2年半院長をしてくれましたが、今は私のいとこ（木野昌也）が院長をしています。

主人は昭和55年阪大(医)卒で、その後阪大Ⅱ内科の神経内科のグループに入り大学院に行きましたが、途中で北摂病院の院長になり、その後阪大へもどり、アメリカのメイヨ・クリニックへ留学し、阪大神経内科の助教授を経て、大阪厚生年金病院の神経内科部長から、現在兵庫医科大学の神経・SCU内科の教授をしています。神経内科は難病が多く、何かありましたらいつでも相談してください。又、研修医のセンター長も兼任していて、毎日多忙な日々を送っております。

子供は、昭和59年に長女を、昭和60年に長男を出産しました。生後6週間から北摂病院の保育所で預ってもらい、私は産前産後6週間休んだだけで仕事に復帰しました。私のまわりの女医さん達は結婚しても仕事はやめないのですが、子供ができるとほとんどの人が仕事をやめてしまい、専業主婦をしています。幸い私は、北摂病院に保育所があり、又、家族の理解と協力もあり、仕事を続けてこられたのですが、もう一つ亡き父と約束したことがあったのです。それは、私が医学部を受験したいと言うと父に猛反対され、小林聖心小・中・高に通学していたこともあり、両親は聖心女子大学に行ってほしかったみたいです。父が反対した理由は、女性は医師になっても子育てなどの理由でやめる人が多く、もし将来やめるのなら、今から医学部を受験する段階でやめなさいといわれました。私が入ることで、将来前途ある男性医師一人を失うことになり、国家の損失だといわれました。そこで、結婚して子供ができてもやめないと約束できるのなら受験してもいいといわれ、その約束もあり、まわりがどんどんやめていく中、仕事を続けてきました。今となっては、父の言っていたことはもっともで、現在の医師不足の一つの原因でもあると思います。

さて、昭和59年生まれの娘は小林聖心小・中・高から、私の両親の期待通り聖心女子大学英文科へ行き、今、社会人3年目で、リンク・アンド・モチベーションという会社でコンサルタントの営業をしています。昭和60年生まれの息子は現在高知大学医学部6年生で、将来は循環器内科をしたいらしいです。あと家族は、私の80歳の母が同居していますが、社交ダンスやカラオケにも行き、生き生きと前向きに生活しています。高齢になっても元気なのが何よりだと思います。

以上、私と家族の紹介をさせていただきましたが、大阪Ⅱゾンタクラブには、関西医大の学生の時の大親友である尼木さんや、女医会でお世話になっている丸山先生や内藤先生もおられ、心強いです。今後ともよろしく御指導の程お願いいたします。

9月例会にて

編集後記

寒い日が続くなかで編集作業をしていますが、この会報が出る頃には春がきていることと思います。毎年同じようにやってきては、いつも少しずつ違うものを残していく春。ZONTAの活動は派手なパフォーマンスがなくても、地味でも、着実に少しずつ成果が得られればいいなと編集作業をしながら思いました。継続は力なり（受験生時代の私のモットーでした）。

坂本　千代